

1. ま え が き

土木学会とその構成員である会員との間を結ぶ「土木学会誌」の編集・発行は、学会活動の中で最も重要な活動の一つである。

今日まで歴代の学会誌編集委員会は、学会誌の編集に多大の努力を払われ、その結果、土木学会誌は多くの学協会誌の中でも内容的に充実したものと自負している。

しかしながら、従来より学会誌に関して会員の間に数多くの意見・注文・不満があることは事実である。これらの会員の意見などを学会誌編集に反映させて、会員と密着した学会誌を生み出すことが、現在の学会誌編集委員会に課せられた重要な使命であることはいままでもない。

土木学会の会員数は、図-1 に見られるように戦後着実に増加し、とくに昭和 36 年以降の会員の増加率

はめざましく昭和 45 年には 31 500 名の会員を擁する、大型の学会となった。

学会員数の増大による会員職域の多様化と、最近の土木工学の技術・研究開発の急速な進展に即応した内容の学会誌づくりを行なうため、土木学会誌編集委員会は、45 年 9 月に、「土木学会誌読者アンケート」を行なった。アンケート調査は、現在の土木学会誌について会員がどのように感じているか、また今後の土木学会誌についてどのような期待を持っているかを調査するために、会員総数の約 3% にあたる会員を回答者として無作為抽出して行なった。アンケートの回収は 45 年 10 月に締め切れ、このほど調査結果がまとまったので、その主要なものについて報告する。

2. アンケートの方法と回答者の構成

土木学会会員名簿を用いて無作為抽出により会員総数の約 3% に相当する 1000 名を選出し、「土木学会誌読者アンケート」を郵送した。住所不明などのため若干数が配達不能として返送されたが、これらについては同数の回答者を新たに抽出し、アンケートの発送を行なったのでサンプル数は 1020 名と当初の数と同じである。一方、回答者数は 174 名とかなり少なく、回収率は 17% であった。回収率がこのように低かった理由としては、アンケートの内容がかな

り細かく、回答に時間を要したにもかかわらず、回収期限が短かったことなどが考えられる。

回答者の分類は、年齢、最終学歴、職域、現在おもに従事している仕事の専門分野、土木学会における会員資格、所属支部、土木学会入会後の年数の 7 項目について行なったが、項目内の分け方は従来の土木学会関係のアンケートを参考とした。

回答者の構成

アンケート回答者の構成に関する分類結果は、図-2 (1)~(4) のとおりである。年齢別と職域別に関しては、アンケート回答者の構成と同時に、昭和 44 年 8 月に土木学会で行なった学会員構成調査の結果との比較を行なっている。図-2 (1)~(2) に見られるように、アンケート回答者構成と学会員構成とは、比較的良好な対応を示していることが認められる。

3. 土木学会誌はどの程度読まれているか

(1) 学会誌の読まれる程度

まず最初に、土木学会誌が毎号どの程度読まれているかということについて、読む程度を「全体にわたってよく読む」から「まったく読まない」までの 5 段階に分けて回答してもらったところ、図-3 のようであった。

さすがに、「まったく読まない」という回答は 1 人もなく、会員の半数近くが学会誌をひととおりは目を

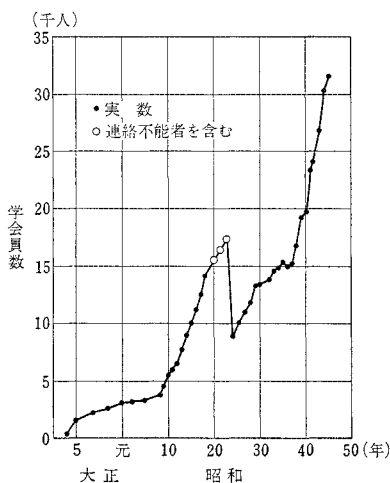


図-1 土木学会会員数の推移

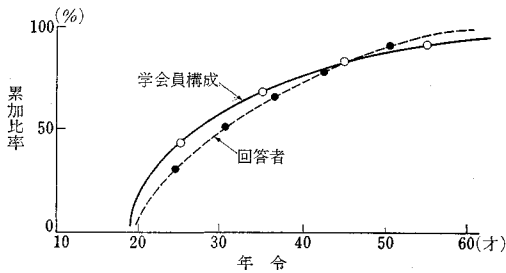


図-2 (1) 回答者の年齢別構成

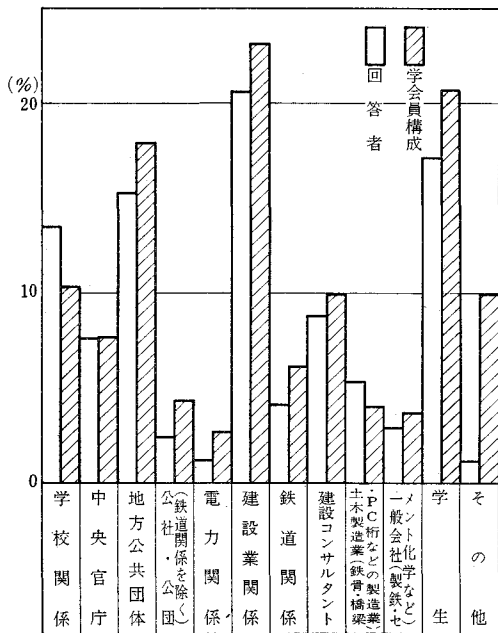


図-2 (2) 回答者の職域別構成

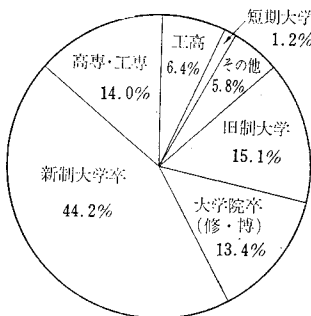


図-2 (3) 回答者の最終学歴別構成

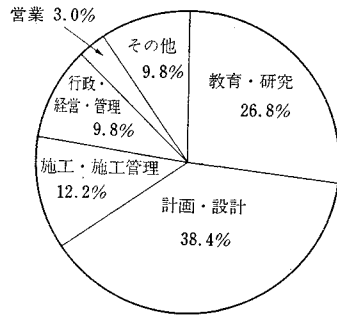


図-2 (4) 回答者の現在主に従事している仕事の専門分野別構成

通していることになるが、アンケートの回収率から推測されるように、アンケートの回答者はどちらかといえば熱心な会員と考えられるためこの結果は若干割り引いて評価する必要があるであろう。この質問に対する年齢・職域などの構成要素による差異はほとんどなく「ほとんど読まない」と回答したものは、その理由として大半が多忙のためとしている。

(2) 項目ごとの読まれる程度(上位5項目)

学会誌の読まれる程度を、さらに細かく、学会誌の項目ごとについて質問した結果は、図-4 に示されるとおりである(項目の区分については学会誌の目次を参照されたい)。また、「毎号ほとんど読む」というものから「まったく読まな

い」とするものについて、それぞれの上位5項目を示すと表-1 のようである。

以上でわかるように、土木学会誌のよく読まれる項目と、あまり読まれない項目とは、かなりはっきりした傾向が見受けられ、とくに読まれない項目については何らかの対策を立てる必要があると考えられる。

(3) 土木学会誌の保存状態

さて、土木学会誌が読まれたあとの運命はどうなるかということで、その保存状態について質問した結果は、表-2 のとおりである。

この結果をみると、実に 98.2% の会員が何らかの形で保存しており、保存の便宜をはかるといことがかなり重要であることがわかる。

4. 現在の土木学会誌について

現在の土木学会誌について会員がどのように評価しているかということで学会誌の悪口およびほめられる点について記述式で回答してもらったところ、悪口を書いて下さった方が 36.3%、ほめられる点をあげて下さった方が 20.2% であった。おもなものについて示すと、悪口では「もっと平易でわかりやすい文章にせよ」というのがもっとも多く 11 名、「広告が多い」「偏よっている」

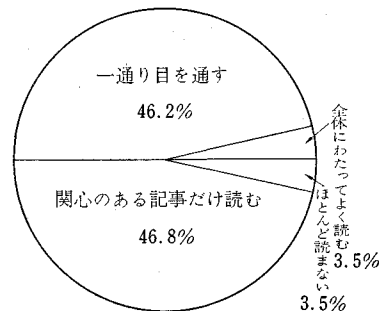


図-3 学会誌の読まれる程度

表-1 学会誌の読まれる程度

毎号ほとんど読む	
●口絵写真	87.1%
●ニュース	34.7%
●巻頭論説	30.2%
●海外事情	27.6%
●豆知識	25.4%

ときどき読む	
●報告	55.0%
●解説	52.7%
●解説記事	52.4%
●座談会	52.4%
●論説	52.1%

ほとんど読まない	
●学生欄	35.7%
●寄書	35.3%
●委員会報告	30.6%
●読者の窓	30.4%
●文献目録	29.6%

まったく読まない	
●学生欄	29.8%
●委員会報告	25.3%
●学会記事	16.1%
●寄書	15.0%
●文献目録	14.8%

表-2 学会誌の保存状態

どのようにして保存しているか	
●そのまま保存	75.1%
●必要部分だけ保存	15.8%
●製本しなおして保存	7.3%
●すぐ捨てる	1.2%
●その他	0.6%

というのがこれにつづいている。偏よっているというのには、内容が特定の分野に偏よっている、執筆者の固定化、大学中心主義という指摘が含まれている。内容とは別であるが学会誌の配布が遅いという指摘も多く(8名)、これについては、できるかぎり改善するようにつとめるよう、考えている。また、ほめられる点としては、「徐々によくなってきている」「よく注意して編集されている」「特集・講座が役立つ」「学生員を優遇してくれる」というのが多かった。

(1) 現在の土木学会誌の水準

次に、現在の土木学会誌の水準についてどのように感じているかという質問に対して、図-5のような結果が得られた。これによると、平均値は「やや高度である」と「ちょうどよい」との中間にあるものと考えられ、学会誌としては適当な水準にあるといえるが、「やや低い」あるいは「かなり低い」と回答したものもある。これを年齢別でみると、20才台、30才台、40才台のそれぞれ11.5%、14.3%、3.8%

%がこのように指摘しており、会員種別でみると、正会員では7.6%であるのに対し、学生会員では15.2%とほぼ2倍の開きがあり、とくに若年会員の間で水準を低いと感じているものが多いことがわかる。また、仕事の専門分野でみると、「高度すぎる」と感じているものが行政・経営・管理関係の33.3%、「やや高度である」というのが営業関係で100%

が目だった。

(2) 学会誌の項目ごとの水準

この面では、図-6に示されるように、報告、資料、講座、解説については大半が「ちょうどよい」としている。いずれの項目についても「やや低い」と感じているのは学校関係者に多く、また資料については学生会員の33.3%が「やや低い」としている。土木学会誌の最近号(第53巻1号・昭和43年1月以降)の中から、よかったと考えられる記事をあげてもらったところ、表-3のようになった。

全般的にみて特集ならびに講座に対する評判はよく、とくに新数学講座については当初むつかしすぎるのではという心配がもたれたが、杞憂にすぎなかったのは幸いであった。また、特集について人気のなかったものを示すと表-4のようである。

この結果をみると、いずれも全国大会に関するものと、回顧と展望に関するものであり、この種の特集のあり方について、今後慎重に検討しなおさねばなるまい。

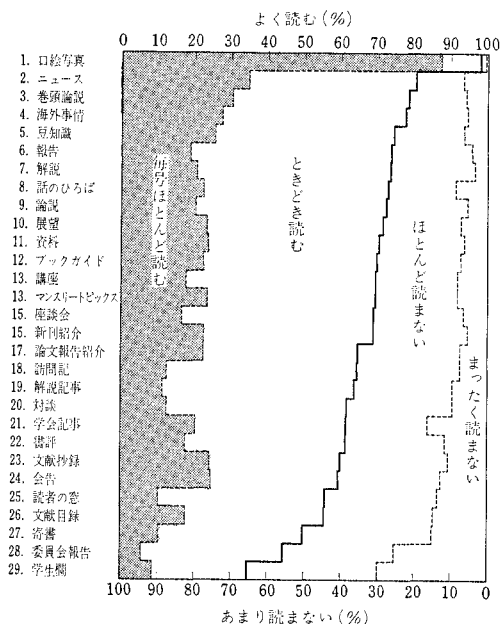


図-4 土木学会誌の項目ごとの読まれる程度

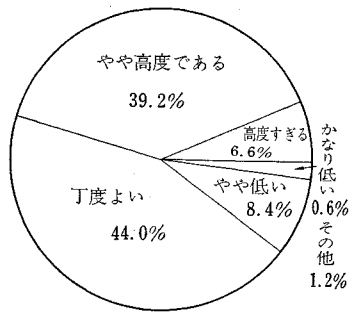


図-5 現在の土木学会誌の水準をどう考えるか

表-3

よかった特集	
●公害と土木技術 (54-6)	33.4%
●土木と海洋工学 (54-1)	27.0%
●土木界の動向をさぐる (53-1)	23.0%
●建設機械 (53-6)	22.4%
●積算 (55-1)	21.8%
●大学土木教育 (53-9)	21.3%

表-4

人気のなかった特集	
●昭和43年度全国大会報告 (53-12)	4.0%
●昭和44年度全国大会報告 (54-12)	6.3%
●68回顧と展望 (54-3)	7.5%
●本年の土木界 (55-3)	8.7%

表-5

編集方式への希望	
●特集に重点をおいてほしい	51.1%
●ニュース性のあるものを取り上げる	34.4%
●一般記事を集めたものが多い	17.2%
●その他	2.9%

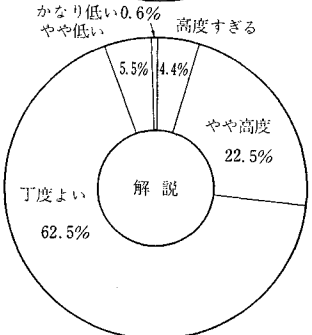
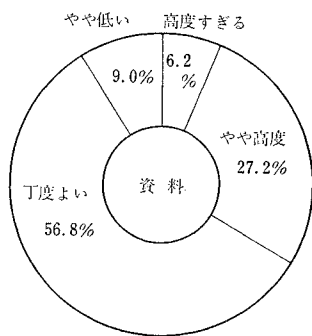
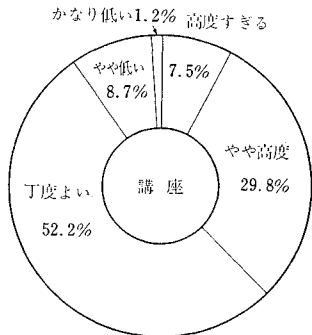
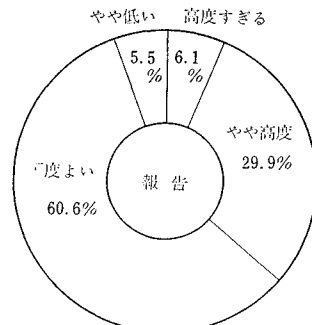


図-6 項目ごとの水準

また、特集・講座以外でよかったと考えられる記事については、総計3件の記事があげられたが、同一記事を2名が指摘したのが最高で他はすべて1人が指摘したのみである。このことは、一般記事に対する受け

取り方が会員によって個人差が多いということの意味しており、多くの分野で活躍する会員すべてに満足される土木学会誌をつくるのが、いかに困難であるかを物語るものといえよう。

なお、最近号でよかった記事をあげよ、というのは、最近号として昭和43年1月号からとしたため、回答者によっては、すでに手元なくなっている場合もあり、設問が不適當であったと反省している。

5. 将来の土木学会誌について

(1) 編集方式

編集方式については、より多く望むものとして表-5の結果が得られ、特集に対する希望が半数を占めていることがわかる(百分率の合計が100をこえるのは2項目以上の指摘による)。

(2) 土木学会誌編集企画にあつて、どのような問題を重点的に扱うべきか。

この質問に対しては、表-6のような回答が得られた。

この結果、土木学会誌に対して単なる情報収集の場というより、専門的知識を得ようとする期待をもっておられることがわかる。

(3) 今後の土木学会誌への希望

以上の結果、今後の土木学会誌への希望として、以下のデータを得た。まず、全体的な水準については、表-7に示されるようなこととなる。

表-7の結果と、現在の土木学会誌に対する水準についての結果をも考え合わせて、少なくとも現在の水準を保つか、できればもう少し上げるのがよいのではないか、と思われる。

表-6

どこに重点をおいて編集するか	
●会員に役立つ技術論文・試験データなどを集大成した解説および資料	45.9%
●土木界全体または各専門分野の動向を会員が把握しうるもの	40.2%
●会員がこれからの時代に対応してゆくに必要話題	39.0%
●会員が日常遭遇する身近な問題	15.6%
●他学協会の技術的な動向	9.2%
●会員の共通な姿勢、職場の問題	4.6%
●その他	0.6%

表-7

学会誌の水準をどうしたらよいか	
●現行維持	59.6%
●水準を上げる	27.5%
●水準を下げる	12.5%

(4) 項目ごとの分量

項目ごとの分量については、現在よりふやしてほしいもの、あるいは減らしてほしいものとしてあげられた項目の中で、それぞれの上位項目を示すと表-8 のようである。

この結果、「なくてよい」とする項目を指摘された方もいたが、いずれも数パーセント以内であった。以上の結果から、現在よりふやしてほしいとされる項目として、講座、資料、口絵写真などがあげられ、多く読まれている項目が大体においてふやす方向ですめられることが望まれている。また、読まれる程度でところで評判の悪かった学生欄については、現行どおりあるいはふやした方がよいという意見が学生員以外の会員にかなり見受けられ、この項目の内容の充実が望まれる。

(5) 文献目録と文献抄録

表-8

かなりふやしてほしい	
●講座	25.0%
●口絵写真	16.3%
●報告	15.7%
●資料	15.1%
●海外事情	15.1%

ややふやしてほしい	
●資料	14.0%
●講座	12.2%
●ニュース	10.5%
●海外事情	9.9%
●書評	9.9%

丁度よい	
●巻頭論説	19.2%
●口絵写真	17.4%
●論説	17.4%
●対談	15.1%
●会告	15.1%

減らしてほしい	
●座談会	7.6%
●対談	7.0%
●論文報告紹介	7.0%
●会告	7.0%
●学会記事	7.0%

表-9

欧文雑誌の論文名の邦訳をどうするか	
●必要(現行維持)	73.5%
●英文以外は必要	13.9%
●一切不要、原文のまま	12.0%
●その他	0.6%

つぎに、文献目録および文献抄録についてのアンケートの結果であるが、文献目録について欧文雑誌の邦訳は必要かどうかという質問については、表-9 の結果を得た。

この結果をみると、大多数のものが現行維持を望んでいることがわかる。文献目録への注文としては、「専門間のバランスをとるように」という希望がもっとも多く、「文献数をふやしてほしい」「もっと早く出してほしい」という意見がこれに次いで多く、その他、「抄録もつけるように」「入手方法を明確に」「広告と分離せよ」という意見も見られ、邦訳については正確というおしかりもあった。文献抄録についての注文としては、「もっと数をふやしてほしい」というのがもっとも多く8名の方が希望しているが、逆に「やめたほうがよい」という方も3名おり、現状でよいと述べられた4名と対抗している。また、抄録をもっとくわしくと希望している方が3名である。文献目録、文献抄録とも保存に便利のように切取線(ミシン)を入れるようにという意見が3名あったが、現在行なわれている切取線については、さらに検討してゆきたい。

最後に、アンケート回答者の学会誌以外に読まれる土木関係雑誌(和雑誌)を調べたところ、本調査では研究報告関係としては、「土木学会論文報告集」「土と基礎」「土木研究所報告」、また一般技術誌としては、「土木施工」「土木技術」「道路」などが比較的多く読まれていることがわかった。

本アンケート調査の内容は、学会誌の細かい内容にまでわたる質問事項32項におよぶ膨大なものであったため、本アンケートに対する感想として、もう少し簡単なものにしてほしかった(12名)という要望が最も多く、アンケートの配布から回収までの期限についての意見(10名)とともに、今後アンケートを行なう

場合に参考となる貴重なものが数多く寄せられた。

6. おわりに

昭和 45 年 6 月、今期の学会誌編集委員会が発足して以来、3 万の会員の期待に応え、会員と密着した学会誌を編集することを基本方針として、委員会活動を行ってきた。

学会誌は、会員の土木技術に関する知識の増強に役立つ内容であること、会員がより広い視野に立てるような思考を生み出すに役立ち、また土木界とそれととりまく他分野との相互理解を深めるに役立つ内容となるように努力している。とくに、学会誌の編集にあたっては、学生会員を含む若い会員、建設現場あるいは孤立した職種で活躍している会員に親しまれる会誌となることを心がけている。このような学会誌の編集方針に基づき、学会誌編集委員会は、昭和 46 年 1 月号から学会誌の表紙・内容の配列など、学会誌の体裁を若干改めた。また、内容も学会誌としては初めての試みである「ひとシ

リーズ」「若い会員の座談会」「法律講座」の開設など種々の新企画を実施した。

調査の結果、比較的評判がよいと思われる特集号は、土木技術に関するものから、今後の土木界の発展過程で土木人が熟慮すべき種々の問題などに関する事柄を積極的に取り上げる長期計画によって、企画編集を行なっていきたい。

なお土木技術の発展に即応したニュース性豊かな記事が、学会誌に欠けるとアンケート調査で指摘されているが、この問題に対処するため、投稿依頼の迅速化、ニュース欄の拡充等をはかっている。

また学会の委員会の研究活動の成果が、会員に正しく環元されていない、という声に対しては、学会に設置されている諸研究委員会の協力のもとに、学会誌をパイプとして成果が公表され全員の技術向上に役立つよう努力してゆきたい。

以上述べてきた学会誌編集方針のもとに、学会誌編集委員会は、各委員の間で活発な意見の交換を行ない、

毎号の会誌の編集を行なっている。本アンケート調査の結果により、会誌編集委員会の方針は大綱において支持されていると認められるが、今後とも会誌に関するアンケート調査を行ない、会員の学会誌に対する声を会誌編集に反映させることを考えるとともに、また、会員に親しまれる学会誌をつくるためには、会員の投稿人口の増加に支えられることが欠かせない要素であるので、学会編集委員会は、会員からの投稿ならびに会誌全般にわたる批判、提言を期待している。

今回行なったアンケート調査は、32 項目にわたる莫大な内容のもので、しかも回答期間が短かったため、アンケート調査にご協力下さった回答者の会員に、大きな負担をおかけしました。ここに、学会誌編集委員会として、アンケート調査にご協力下さった回答者の方々ならびにプログラムの作成、結果の分析などにご協力下さった大林組はじめ関係者の方々に心から感謝する次第であります。

海外 ニュース

メッシナ海峡における懸賞設計

イタリア政府では、イタリア本国とシシリー島を連絡するため、メッシナ海峡に橋か、トンネルかをつくることで、懸賞設計を募集した。

この結果、応募された 144 の概略設計のうち、1 等（賞金 24 000 ドル）に 6 つの設計、2 等（賞金 4 500 ドル）に 6 つの設計が選ばれた。そのうちのいくつかを紹介する。

吊橋 1：については、一つは 4 スパン（1 525-4 462-4 462-1 525 ft）の double deck の設計で、3 本のタワーの高さは水面より 738 ft、とくに中央のタワーは、剛度を与えるために A 形とし、上部床板には 8 車線道路、下部床板は 6 車線道路と複線の鉄道に利用でき、総工費は 7.8 億ドルとしている。また、別の吊橋案では、同じように double deck とし、3 スパン（2 250 + 5 250 + 2 250 ft）で設計している。タワーの高さは水面より 837 ft、

上部床板は 6 車線道路、下部床板は複線の鉄道専用としている。工費は 5 億ドルである。

トンネル案では 11 500 ft の長さをもつタル型の二つの沈埋トンネルとして設計されている。トンネルの一つは 2 車線道路、他のほうは単線鉄道としている。工費は 2.88 億～3.6 億ドル程度を見積っている。

全体的には、トンネル案より、橋梁案が多く提案されている。また、イタリアの公共土木事業者の Salvator Lauricella 氏によれば、海中での地震、および、トンネルの場合、入口が Reggio Calabria と Messina の中心部から 20 マイル離れた所に設けられるなどの理由から、橋梁案を取るだろうといわれている。

Lauricella 氏は、また、工期を 5 年ほどで 1977 年までに完成させる予定だったが、1975 年の 5 年間のイタリア政府の予算からはずされ、資金的な面から問題があるとしている。

(Engineering News Record, 1970, 12, 10, p. 14 より抜すい)